

有田町は、佐賀県の西部、西松浦郡に位置し、北側に伊万里市、南側に長崎県佐世保市、波佐見町との境界を接する町である。長崎自動車道の波佐見・有田インターチェンジは、町の南側の波佐見町側にあるが、高速道路の開通により福岡方面からの観光客も多く、年間約150万人の流入があり、このうちの半分は陶器市（毎年4/29～5/5）に訪れる人々に占められている。

今回は、この有田町の陶磁器産業のなりたち、生産の歴史をとりあげてみた。

窯業圏域のなりたち

有田焼、伊万里焼など「肥前もの」「西もの」と呼ばれる陶磁器は、佐賀県西部から長崎県東部にかけての2市6町（佐賀県側の有田町、西有田町、山内町、伊万里市、嬉野町、塩田町、長崎県側の波佐見町、佐世保市三川内）の地域で主に生産され、我が国の窯業の二大産地の一つとして広域窯業圏を形成している。

有田町を中心としたこの肥前地域一帯は、安土桃山時代に、朝鮮半島との交流の中で陶業技術がまず伝えられ、唐津風の陶器が生産されていた。これが後の磁器産地形成の基礎となつたと言われている。秀吉の時代、文禄・慶長の役の二度の朝鮮出兵を終えた佐賀の鍋島直茂、多久安順、後藤家住等は、出

兵後の財政建て直しのため陶器の生産拡大を目的として、陶工のグループをそれぞれ連れ帰り、多久領内に留められていた李朝の陶工李参平が、元和2年（1616）有田の泉山に陶石を発見し、上白川天狗谷に築窯して、白磁焼成に成功したのが日本における磁器の創業であると伝えられている。

磁器焼造の開始後、有田周辺で継承されていた古唐津系の陶器製造は、有田谷の地形条件、陶石の手に入れ易さなどから、この地を中心として発達し、他の地域からも陶工が集まり、急速に磁器産業が形成されている。

伊万里焼として全国へ展開

肥前の焼きものが中央に広まったのは、磁器の成功後から始まったものではなく、すでに北部九州一帯の焼きものが、唐津焼として京都などにも広がっていたといわれる。有田で磁器が焼造された後、全国的に有名になり、当時は有田磁器の積出港であった港、伊万里の名前で「伊万里焼」と呼ばれるようになった。

全国に広まったもう一つのきっかけが、柿右衛門の「赤絵」である。南山の酒井田柿右衛門の文書によると、伊万里の商人東島徳左衛門は中国人から手に入れた技法と色絵具をもとにして、赤絵付を柿右衛門に依頼、これが成功したのが1640年代であり、当時は長崎へ持ち込み、オランダ人や中国人に売っていたと言われている。

これ以後、赤絵付技法はたちまち地域一帯にひろがり、国内だけでなく、当時ヨーロッパと中国・東南アジアとの貿易を支配していた東インド会社により、ヨーロッパへも輸出され、ヨーロッパ各地における磁器生産の開始にも大きな影響を与えたといわれている。それまでは中国の磁器がヨーロッパや、日本に輸出されており、日本の磁器は、安価な低級品としての地位しかなかったようであるが、中国大陸での清と明の戦乱により、中国の磁器が輸出できなくなり、その結果赤絵付けに成功したばかりの日



図表1 主要府県別陶磁器生産額(有田町史より)

府県名	大正二年	八年	九年	十年	十一年	十二年	十三年
愛知	七、三六三、二九	七、八〇三、一	六、一三、一九	九、三九、二四	六、一六、二五	四、五七、二七	八、九七、
岐阜	二、二〇五、一一	八、一八、一〇	五、六六、一一	一、九四、一一	二、〇三、一一	六、五三、一一	四、四〇、
佐賀	一、七二二、	四、九〇八、	三、一六四、	三、四七二、	二、九一〇、	二、九八一、	三、五六二、
京都	一、七七二、	四、五三二、	二、九三七、	三、四六四、	四、〇〇三、	四、三六〇、	四、〇四一、
石川	六、四四五、	二、三七六、	二、七一九、	二、六六七、	二、六四二、	二、三九三、	三、四四一、
三重	三、二二二、	一、四一九、	一、八六〇、	二、一四二、	二、七七七、	三、三四三、	三、二五五、
兵庫	二、八二二、	一、〇八二、	一、二二二、	一、五〇八、	一、六九八、	一、五四九、	一、六六八、
長崎	三、三三五、	一、二九五、	一、二六九、	一、二九〇、	一、七〇六、	一、七九一、	一、八八六、
福岡	二、五二二、	八三八、	八一五、	一、一五七、	一、六四三、	一、八二四、	一、六二八、
福岡	二、六四二、	一、〇四一、	一、一〇二、	一、一五六、	九四六、	一、一〇〇、	一、〇一六、
福岡	一、九七七、	三、三四一、	六六二、	一、〇一八、	一、三三九、	一、七四七、	一、九五六、
福岡	二、三三〇、	五、二九九、	四、九〇六、	五、〇六三、	五、〇四二、	六、五三六、	六、七七七、
計	一七、六七六、六四	六五、九六二、八四	〇、五七六、〇四	〇、五七六、〇四	四、九一六、四一	七、四四〇、六八	五、三三三、

図表2 主要府県別陶磁器生産額(有田町史より)

本産がその代替えとしてヨーロッパ各地へ広がることになる。

陶磁器製造の国内最初の近代化

明治維新、廃藩置県に伴い、藩窯制度や藩による保護・統制がなくなった結果、誰もが自由に磁器を製造し販売できるようになり、窯業に関連する各分野において西洋の考え方を積極的に導入され、近代化が行われた。幕末には窯焼き133戸、赤絵屋16戸だったものが、窯焼き206戸、赤絵屋約50戸へと急増しており、2千人以上の人々がこの地で働いていたようである。

陶磁器製造の近代化は、この地域が国内でも最初に行ったといわれ、砕石機や製陶機械の導入をいち早く行った精磁会社や日本における最初の会社組織である香蘭社(1875年)が設立されている。この近代化のきっかけとなったのは、1867年のパリ博覧会への出品といわれ、市場の拡大により生産技術の導入が要求されたことによるものである。

有田磁器の地位の維持

江戸時代から藩の保護・統制のもとに陶磁器の製造が進められていたが、全国への出荷、海外への出荷のためには、注文を受け、商品として販売し、代金を回収する機能として問屋のめざましい活躍が見られる。主なところでは、筑前芦屋(福岡県遠賀郡)、紀州箕島(和歌山県有田市)など数多くの商人が、商品を伊万里の問屋から仕入れ、全国に販売していたと言われている。箕島の商人がなぜ有田磁器を取り扱ったのかは、町史によれば、黒江塗(和歌山県海南市)を九州で販売するために訪れたことがきっかけとなり、江戸でも販売されるようになったそうである。

品質保持、近代化に向けて

全国に販売され、藩のドル箱的な存在になった有田磁器は、藩による専売制度、取り扱い商人の制限などの統制を経て、明治維新後は自由な商業活動が実現されたが、製造家の乱立により、粗製濫造が引

き起こったため、窯業技術の教育を目的とした日本最初の工業学校「勉脩学舎」(1871年、現在の有田工業高校)が地元有志の寄附によって設立された。その後、松方デフレ政策による深刻な不況のため、製陶地区の製品協定としての陶業盟約(1866年、後に同業組合の設立に至る)が結ばれたり、さらに現在も続いている有田陶器市の発端となる有田品評会(西松浦郡陶磁器品評会1896年)の開催、その4年後にはパリ万国博覧会へ出品されるなど、品質向上、技術改良のための様々な策が行われてきている。

また、近代化のための設備投資に必要な資金の確保のため、1888年、有田貯蔵銀行(現佐賀銀行)、1892年、協立銀行が設立され、磁器製造における金融体制も整い、近代企業としての活動も本格化している。

当時の有田磁器の製造業は、明治政府の殖産興業政策の代表的な産業として進められ、前田正名による1884年の「興業意見」においても、機械の導入による近代化が強く主張されている。さらに、大隈重信は、1896年の泉山での園遊会の席上で窯業振興を訴えるなど、輸出の低下、瀬戸・美濃による追い上げなどによる有田磁器の不振からの脱却が期待されていた。

窯業を支える家内手工業

1897年（明治30年）頃の陶磁器の売上高24万円に対して、原材料の陶土約7%、労賃31%、薪材15%、窯掛雑費・他雑費が約15%、純益12%という構成であり、コストダウンのための生産技術、機械の導入が求められていた。さらに、全国の陶磁器製造体制も零細であり、1903年（明治36年）の内国勸業博覧会での陶磁器業の改善すべき課題の中での指摘でも、全国5,100戸余りの製造家に対して、約24千人の職工、戸当たり4～5人の家内手工業が大部分を占めていた。当時の佐賀県窯業の従業者規模では、80～100人規模が2カ所（香蘭社は99人、精磁会社85人）、40～50人2カ所、30人1カ所、10～20人24カ所となっており、比較的窯業企業は中企業でもあり、窯業振興への期待も高かったと思われる。

現在の有田町では、製造業従業者3,958人（1992年）のうち、窯業関連製造業は3,419人、86%を占めており、1991年事業所統計調査では、民営事業所299カ所、10人未満が195カ所の65%を占め、家内手工業事業所も相当数あるようである。

明治以降の陶磁器産業の発展と佐賀の停滞

1897年（明30年）の九州鉄道の早岐まで開通により、有田駅が営業を開始し、翌1898年には貨物駅として中樽停車場が開設された結果、それまで伊万里から海上輸送に頼っていた有田磁器は、鉄道輸送へ転換し、伊万里焼として全国に名が知られていたものが、有田焼として有田が生産・販売の地域として知られ、その後の発展をみることになる。大正時代には、第一次大戦による好況も手伝い、生産も機械化、効率化によって製造品種に碍子をはじめとした工業磁器などが加わり幅広いものとなっており、機械ろくろの普及、登り窯から石炭窯への転換、手工に加えて機械の導入などによる技術改良、生産能力の向上が進められる。

この時期は、全国的に窯業産業が振興された時期であり、全国の製造戸数も、1898年（明31年）の43

百戸から1925年（大14年）には75百戸、1.7倍へと拡大し、生産額は1898年4,965千円から1925年78,177千円、15.7倍へと増加している。府県別の生産額をみると、1913年（大2年）は愛知41%、岐阜12%、佐賀、京都がそれぞれ10%だったのが、1924年（大13年）には、愛知41%、岐阜18%、京都6%、佐賀5%となり、佐賀、京都のシェアは低下し、他県の伸びの方が大きかった。この原因としては、濃尾地方の窯が薪から石炭への転換、鉄道利用による販売流通など、早急な近代化に対して、有田のそれらが立ち後れたためと言われている。そのため、大正末からの有田は、経済的には小康状態を続けたまま、昭和の金融恐慌、世界恐慌を経て、大陸への輸出によって一時息を吹き返しそうになったが、大戦勃発により戦時統制を経て、再出発を図ることとなる。

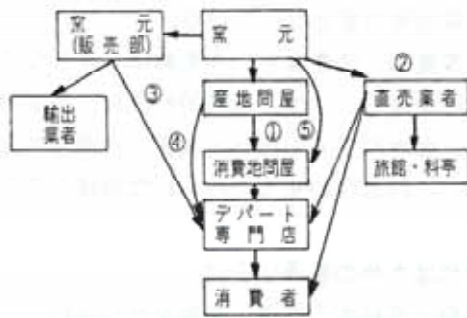
流通構造の変化

有田磁器は、江戸時代から明治の鉄道敷設までは、伊万里港からの出荷のため、伊万里の商社・問屋による流通が行われ、鉄道敷設後は、大正、昭和の戦前まで有田焼として有田地区の商社・問屋による流通がなされていた。この間、これらの問屋によって、金融・原料供給機能が発揮されていたものが、戦時中の生産統制により問屋機能は地域から失われた。しかし、有田陶磁器の生産体制は、戦後も分散的、小規模な製造家が存在していたため、戦前のような金融・原料供給機能の復活とまではならなかったが、新たな流通形態も誕生し、戦後は図表3のような流通経路となっているといわれている。

2万人の地域を支える陶磁器

これらの陶磁器製造業、卸売業、小売業など、町で働く人々は現在どうなっているのかを、有田町の資料から整理すると次のようになっている。

居住人口14千人のうち、約6千人が町内で働き、さらに町外から約4千人の就業者が通勤している。これを5年前の国勢調査での産業別就業者、従業者でみると（1990年にはこの表がない）、製造業の



- ① 有田焼産地の最も一般的なケース
- ② 直売業者の販売形態
- ③ 組合未加入企業や窯元の販売形態 (柿右衛門, 今右衛門など)
- ④, ⑤ 最近の新しい販売形態 (規模は小さい)

図表3 有田焼の流通経路(有田町史より)

流入超が1,481人で最も多く、次いで卸・小売の688人となっている。

ここで、窯業に関連する従業者がどの程度いるのかをみってみる。直接的に関係するのは、窯業製造業と販売に関わる卸・小売業であり、町の資料による工業統計ベースでは、1992年の製造業従業者のうち窯業関連従業者は、ダンボール製造や印刷業など窯業に関連する従業者までを加えると、90%が窯業関連製造業に従業しており(出荷額では86%)、1991年の商業統計では、卸売業従業者の86%(販売額でも同率である)、小売業従業者では40%(販売額は42%)、両方あわせると商業関係では60%を占めている。したがって、町で従業する製造業従業者のうち90%として42百人、卸・小売業従業者の60%として16百人、合計58百人が窯業製造・販売の直接雇用数であり、これに付随するサービス従業者などを考慮すると概ね千人程度の就業の場を創出していることになる。これらの従業者の家族まで含めると20千人規模の町を支えているといえる。

これからの陶磁器

1991年の佐賀県の陶磁器製造品出荷額の全国シェアをみると、和飲食器では岐阜に続く第二位、洋飲食器は第五位、置物は第二位となっているが、陶磁器全体において一時期のように高級品が売れなくなり、徐々に陶磁器の売上は低下している。陶磁器の製造・販売だけに頼ってられない状況となっている。しかも、中京地区の企業などは既に東南アジアへ生産をシフトするなど、大量生産による低価格の陶磁器製品の輸入が今後も益々増加することが予測され、有田の陶磁器生産地としての新たな

人口(常住人口)	13,826人
うち就業者	7,376人
うち町内就業	5,915人
昼間人口	16,485人
うち就業者	9,882人
うち町外から	3,967人
一日の人口流出入差	2,659人
うち就業者	2,506人

図表4 有田町の人口

	常住地による就業者	従業地による就業者	従業者と就業者の差
第1次産業	124	127	3
農 業	122	125	3
林 業	1	2	1
漁 業	1	-	-1
第2次産業	3,552	5,148	1,596
鉱 業	5	8	3
建 設 業	351	463	112
製 造 業	3,196	4,677	1,481
第3次産業	3,729	4,417	688
卸売・小売	2,244	2,672	428
金融・保険	136	216	80
運輸・通信	223	326	103
電気・ガス	25	11	-14
サービス業	905	1,015	110
公 務	196	177	-19
分類不能	2	2	0
総 数	7,407	9,694	2,287

図表5 常住地、従業地による就業者数(1985年)

製 品	全 国	第1位	第2位	第3位	第4位	第5位	備 考
陶磁器製	129,555	46,981	29,810	17,693	11,519	6,145	
和飲食器		岐阜 36%	佐賀 23%	長崎 14%	愛知 9%	京都 5%	
陶磁器製	108,564	52,706	24,366	12,993	8,454	4,121	
洋飲食器		岐阜 49%	愛知 22%	三重 12%	石川 8%	佐賀 4%	
陶磁器製	45,850	17,822	8,563	3,803	3,656	2,169	
置物		愛知 39%	佐賀 19%	岐阜 8%	滋賀 8%	石川 5%	
陶磁器	28,078	20,195	5,412	1,056	825	191	秘匿
給付品		岐阜 72%	愛知 19%	石川 4%	長崎 3%	京都 1%	佐賀
陶磁器用	45,801	26,937	13,202	2,309	1,351	427	
はい土		岐阜 59%	愛知 29%	佐賀 5%	滋賀 3%	三重 1%	

資料:「工業統計表-一品目編」

図表6 県別の陶磁器関連製品出荷額の上位5県

展開が求められている。

400年の伝統と文化を持つ有田が、これら歴史的な産業・技術資源、現在の資源をこれからどう生かしていくかがこれからのまちづくりの課題となっている。